

## 令和6年度入学試験問題

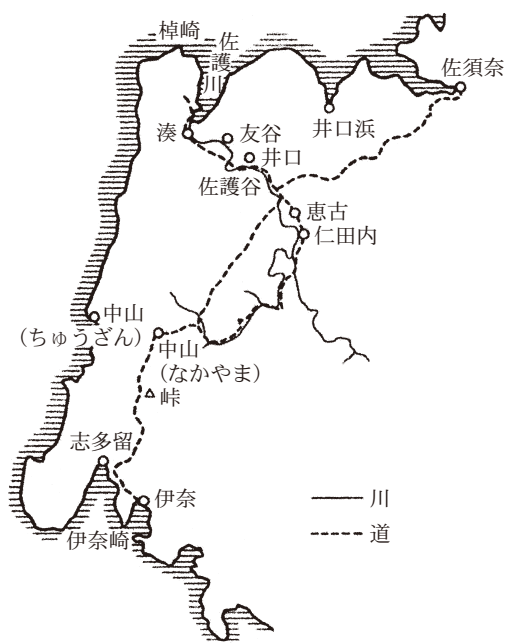
### 総合問題(教育支援専門職養成課程・心理コース)

#### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答はすべて別紙解答用紙に記入下さい。
3. 解答用紙は3枚です。
4. 解答方法が論述方式の場合は、1マス目から書き始め、1文字空けた  
り、改行したりせずに横書きで書き進め下さい。
5. 各解答用紙には、受験番号を記入する欄がそれぞれ1箇所あります。
6. 試験終了後、問題冊子は持ち帰り下さい。

問題 以下は、ある民族学者による著書の抜粋です。文章を読んで以下の問に答えなさい。

さて私は老人からいろいろ話をきいている間に、この村(伊奈)には古くから伝えられている帳箱<sup>註1</sup>があり、その中に区有文書がはいっていることを知った。そこでそれを見せてくれないかとたのんでみると、自分の一存ではいかぬという。帳箱には鍵がかかっており、その鍵は区長が保管しているが、総代立ち会いでないとあけられないという。それでは二人立ち会いの上で見せていただけないかとたのむと老人は人をやって寄りあいの席から二人をよんで来た。事情をはなすと開けて見せる位ならよかろうと、あけてくれた。その夜は宿で徹夜でその主要なものをうつしたが、実は旅のつかれがひどいので能率はあがらない。翌朝になって、「この古文書をしばらく拝借ねがえまいか」と老人の家へいったのむと、老人は息子にきいてみねばという。きけば今日も寄りあいのつづきがおこなわれていて息子はその席へ出ているとのことである。そしてまた人をやってよんで来てくれた。すると息子はそういう問題は寄りあいにかけて皆の意見をきかなければいけないから、借用したい分だけ会場へもって行って皆の意見をきいてくるといって、古文書をもって出かけていった。しかし昼になってもかえって来ない。午後三時をすぎてもかえって来ない。「いったい何の協議をしているのでしょうか」ときくと、「いろいろとりきめる事がありました……」という。その日のうちに三里ほど北の佐護まで行きたいと思っていた私はいささかジリジリして来て、寄りあいの場へいってみることにした。老人もついていってくれる事になった。いってみると会場の中には板間に二十人ほどすわっており、外の樹の下



対馬西北部

に三人五人とかたまってうずくまったまま話しあっている。雑談をしているように見えたがそうではない。事情をきいてみると、村でとりきめをおこなう場合には、みんなの納得のいくまで何日でもはなしあう。はじめには一同があつまって区長からの話をきくと、それぞれの地域組でいろいろに話しあって区長のところへその結論をもっていく。もし折り合いがつかねばまた自分のグループへもどってはなしあう。用事のある者は家へかえることもある。ただ区長・総代はきき役・まとめ役としてそこにいなければならない。とにかくこうして二日も協議がつづけられている。この人たちにとっては夜もなく昼もない。ゆうべも暁方近くまではなしあっていたそうであるが、眠たくなり、いうことがなくなればかえってもいいのである。ところで私の借りたい古文書についての話しあいも、朝話題に出されたそうであるが、私のいったときまだ結論は出ていなかった。朝から午後三時まで古文書の話をしていたのではない。ほかの話もしていたのであるが、そのうち古文書についての話も何人かによって、会場で話題にのぼった。私はそのときそこにいたのではないから、後から概要だけきいた話は、「九学会連合<sup>注2</sup>の対馬の調査に来た先生が、伊奈の事をしらべるためにやって来て、伊奈の古い事を知るには古い証書類が是非とも必要だというのだが、貸していいものだろうかどうだろうか」と区長からきり出すと、「いままで貸し出したことは一度もないし、村の大事な証書類だからみんなよく話しあおう」ということになって、話題は他の協議事項にうつった。そのうち昔のことをよく知っている老人が、「昔この村一番の旧家であり身分も高い給人<sup>注3</sup>(郷土)<sup>注4</sup>の家の主人が死んで、その子のまだ幼いのがあとをついだ。するとその親戚にあたる老人が来て、旧家に伝わる御判物<sup>ごはんもの</sup>を見せてくれと行って持っていった。そしてどのように返してくれとたのんでも老人はかえさず、やがて自分の家を村一番の旧家のようにしてしまった」という話をした。それについて、それと関連あるような話がみんなの間にひとりひとりせられてそのまま話題は他にうつった。しばらくしてからまた、古文書の話になり、「村の帳箱の中に古い書き付けがはいっているという話はきいていたが、われわれは中味を見たのは今が初めであり、この書き付けがあるのでよいことをしたという話もきかない。そういうものを他人に見せて役に立つものなら見せてはどうだろう」というものがあつた。するとまたひとしきり、家にしまつてあるものを見る眼のある人に見せたらたいへんよいことがあつたといういろいろの世間話がつづいてまた別の話になつた。

そういうところへ私はでかけていった。区長がいままでの経過をかいつまんでひととおりはなしてくれて、なるほどそういう調子なら容易に結論はでないだろう。とにかくみんなが思い思いの事をいって見たあと、会場の中にいた老人の一人が「見ればこの人はわるい人でもなさそうだし、話をきめようではないか」とかなり大きい声でいうと外ではなしていた人たちも窓のところへ寄って来て、みんな私の顔を見た。私が古文書の中にかかれていることについて説明し、昔はクジラがとれると若い女たちが美しい着物を着、お化粧して見に行くので、そういうことをしてはいけないと、とめた書きつけがあるなどはなすと、またそれについて、クジラをとったころの話がしばらくつづいた。いかにものんびりしているように見えるが、それでいて話は次第に展開して来る。一時間あまりもはなしあっていると、私を案内してくれた老人が「どうであろう、せっかくだから貸してあげては……」と一同にはかった。「あんたが、そういわれるなら、もう誰も異存はなかろう」と一人が答え、区長が「それでは私が責任をおいますから」といい、私がある場で借用証をかくと、区長はそれをよみあげて「これでようございますか」といった。「はアそれで結構でございます」と座の中から声があると、区長は区長のまへの板敷の上に朝からおかれたままになっている古文書を手にとって私に渡してくれた。私はそれをうけとってお礼をいって外へ出たが、案内の老人はそのままあとにのこった。協議はそれからいつまでつづいたことであろう。

私にはこの寄りあいの情景が眼の底にしみついた。この寄りあい方式は近頃はじ  
① まったものではない。村の申し合せ記録の古いものは二百年近いまえのものもある。それはのこっているものだけでもそれ以前からも寄りあいはあったはずである。七十をこした老人の話ではその老人の子供の頃もやはりいとまと同じようになされていたという。ただちがうところは、昔は腹がへったら家へたべにかえるというのでなく、家から誰かが弁当をもって来たものだそうで、それをたべて話をつづけ、夜になって話がきれないとその場へ寝る者もあり、おきて話して夜を明かす者もあり、結論がでるまでそれがつづいたそうである。といっても三日でたいいのむずかしい話もかたがついたという。気の長い話だが、とにかく無理はしなかった。みんなが納得のいくまではなしあった。だから結論が出ると、それはキチンと  
② 守らねばならなかった。話といっても理窟<sup>註5</sup>をいうのではない。一つの事柄につい

て自分の知っているかぎりの関係ある事例をあげていくのである。( ③ )というのはこういう事なのであろう。(中略)

こうした話を細々と書いたのは、昔の村の姿がどのようなものであったか、村の伝承がどのような場で、どんな時に必要であったか、昔のしきたりを語りあうということがどういう意味をもっていたかということをも具体的に知っていただきたいためであった。

日本中の村がこのようであったとはいわぬ。がすくなくも京都、大阪から西の村々には、こうした村寄りあい古くからおこなわれて来ており、そういう会合では郷土も百姓も区別はなかったようである。領主—藩士—百姓という系列の中へおかれると、百姓の身分は低いものになるが、村落共同体の一員ということになると発言は互角であったようである。

注1 帳箱(ちょうばこ)…帳簿や筆記用具などを入れておく箱のこと

注2 九学会連合(きゅうがつかいれんごう)…日本民俗学を支えた渋沢敬三の提唱により、1947年(昭和22年)に人間科学に関係の深い6つの学会の組織から発足し、相互啓発と普及および学術交流を目的とした団体等のこと。

注3 給人(きゅうにん)…戦国時代に、大名被官として所領を保障され在地支配を行なった武士や代官のことを指す。江戸時代であれば、蔵米の代わりに知行地を与えられた武士と同義

注4 郷土(ごうし)…江戸時代の武士階級(士分)の下層に属した人々を指し、武士の身分のまま農業に従事した者あるいは武士の待遇を受けていた農民と同義

注5 理窟(りくつ)…理屈と同義

※本文中には、今日の人権擁護の見地に照らして不相当と思われる語句や表現がありますが、作品発表時の時代的背景を考え合わせ、また著者が故人であるという事情に鑑み、底本どおりとしました。

宮本 常一(1984). 忘れられた日本人. 岩波書店. p.12-20 より一部改変

問 1 下線①について文章を踏まえ、著者がどうしてそのように感じるに至ったのかについて、あなたの考えるところを 200 字以内で述べなさい。

問 2 下線②について文章を踏まえ、なぜそのようなことがいえるのか 300 字以内で述べなさい。

問 3 文中の( ③ )に最も当てはまると考えられる比喩表現を入れなさい。

問 4 この文章は、刊行された当時から数十年を経た現在の世の中で忘れられつつある「寄りあい」について書かれたものです。忘れられつつある社会的背景とそれによって生じうる事柄について 300 字以内で述べなさい。